

平成 28 年度地域医療構想調整会議 議論まとめ(島しょ)

救急医療の充実について

○広尾病院では搬送可能となっていた事案で、天候不良で広尾に行けず他県の病院との調整となった場合、電話のみでの相談のため患者の状態が上手く伝わらず、島内での対応が可能と判断され、ヘリ搬送できないケースがあった。天候等で都内での受入れが難しい場合の県外の受入れ先を確保して欲しい。(三宅島)

○小笠原村では、南鳥島と硫黄島の搬送取次ぎを行っている。しかし、南鳥島は電話回線が少ないのか、症状の聞き取りをしようとしても電話がなかなか繋がらず調整に時間がかかったケースあった。両島から直接搬送要請できるようにならないか。(小笠原)

医療連携の強化 (内地との連携)

○専門医療について、内地から巡回診療にきている病院が入院を受けてくれることもあるが、たまたま満床で対応できない場合等は、ソーシャルワーカーがいないため診療所医師が入院先を探すことになり、その間診療がストップしてしまう。(三宅島、新島、神津島)

○専門医療についても、広尾病院から巡回診療に来てもらえれば急患発生時にやりとりがしやすくなる。(三宅島)

○ケアマネが島にいないこともあり退院調整の窓口が定まっておらず、退院調整に苦労したり、家族に負担をかけるケースがある。(利島村)

○島民には、島に帰りたい希望が強い人が多く、認知症になってもその思いは変わらない。しかし、キーパーソンは内地にいる場合が多く、退院調整が十分でないまま島に戻り、またすぐに内地へ救急搬送されるケースもある。そうならないよう、内地で転院し、その間に、家族と島と転院先の病院とで退院調整することが望ましいが、転院先の選定は非常に困難で日常業務に差支えることもある。島の状況を理解している回復期的な病院で一度受け入れてもらえれば助かる。(三宅島)

在宅移行支援の充実

○ケアマネ 2 名で全島カバーしている状況。退院調整の際に顔の見える関係がないため、患者の状態を正確に把握できないまま島に戻ってきてしまい、その後の対応に苦労することがある。日頃からWEBシステムを使ってケアマネと広尾病院の退院支援看護師等が連携できると良い。(新島)

○内地の病院から患者が島に戻る際、退院の連絡が直前であったり、無い場合がある。明らかに島での暮らしが難しい人が帰ってくると本当に無理をして支えている状況。内地の病院では島の実情を理解していない医師も多く、在宅移行は決まる前の早い段階から島に連絡するように周知して欲しい。(三宅島)

○通院できない人には大島医療センターの医師が訪問診療を行っている。(大島町)

○現在、訪問看護は行っていないが導入に向けて前向きに検討しているところ。(利島村)